

# 図書館だより

## 目次

古代ペルガモン王家の図書館	—新海 邦治	1
「今、学生にすすめる本」特集（その16）		
—五関 正江 佐野 綾子		2
八木 京子 村井 早苗		
井出 祥子 森田 伸子		3
平木 典子 永田 三郎		
大学の図書館が象徴するもの	—田中 珠理	4
背表紙からの読書	—長谷川 郁子	
洋書の棚にも行ってみた	—田中麻衣子	5
韓国と日本の図書館	—盧 回男	
展示「日本女子大学目白地区建物ウォッチング」	—鈴木 賢次	6
「まずは」「もっと」日本女子大学図書館を知ろう	—吉原三紀子	10
卒業生の図書館利用について 旧教職員の図書館利用について		12
図書館からのお知らせ（目白・西生田）		



## 古代ペルガモン王家の図書館

新海 邦治

アテネのアクロポリスの麓に広がるアゴラ遺跡の一角に、白大理石造りの長大な柱廊が建っている。アッタロスのストアと呼ばれ、紀元前2世紀半ばにペルガモン第4代の王アッタロス2世が、青年時代の遊学の地アテナイ市に寄贈したと伝えられている。現在見られるのはその遺跡を1950年代に完全復元したもので、内部は博物館として使われている。

だがこの壮大な柱廊を寄贈することができたペルガモン王国が歴史に登場するのは、漸く前3世紀半ばに至ってのことである。セレウコス朝から独立し、ローマと同盟したアッタロス家の諸王は、ペルガモンの丘陵に置かれた首都を壮麗な建築群で美化することに努めた。ペルガモンはトルコの大都市イズミールから北上すること約100kmの距離にある。高低差の大きい地形を巧みに生かして、城壁で囲んだ丘上に、王の宮廷をはじめ、アテナ神殿、図書館、大劇場に柱廊、ゼウスの大祭壇などが造られていた。ベルリンの通称ペルガモン博物館に復元されている大祭壇は、ペルガモンの栄華を伝えるのに充分であろう。この大祭壇を造営した第3代の王エウメネス2世の時代が、王国の最盛期であった。王はまた図書館のために書物を求めて国中を徹底的に探索し、有償無償で集めた書物は20万卷に上ったと言われる。現在、遺構から知られる限りでは、図書館は大小の4室から成っていた。そのうち13.5m×16mの広さを持つ大きな一室は、北と東の壁が3.5mの高さに残っており、その壁には約1m間隔で床から2.2mの位置に掘られた穴の列が見られる。木製の書架を壁に固定するためのものだったと考えられている。床には、壁から約50cm離して石のベンチが部屋の三面を囲むように連なっている。書架は恐らくこのベンチを土台として、その上に立てられていたのであろう。壁と書架との間を50cm開けたのは、湿気によってパピルス紙が傷むのを避けるための工夫であった。入って正面に当る北側の壁の中央には、現在ベルリン博物館に収蔵されている高さ3.5mのアテナ女神像が、学芸の守護神として安置されていた。台座を含めて4.5mになるこの像の高さは、書架の高さを4～5mと推定する根拠ともなっている。だがそれでも研究者たちの計算によれば、この一室の書物の収容力は1万5千～2万卷程度にすぎない。残りの膨大な書物が他の3室その他にどのように収蔵されていたのかは、不明のままである。

王たちの書物収集熱はアレクサンドリア図書館との間にやがて確執を生み、ペルガモンはパピルス紙の輸入を止められることになる。新たな書写材の開発を迫られて生まれたのが羊皮紙だった。parchment とは「ペルガモン紙」の謂に外ならない。（図書館長・文化学科教授）

## 「今、学生にすすめる本」特集（その16）

### ■五 関 正 江（食物学科助教授）

武藤静子著 『ボケないで人生を楽しみつくす：九十三歳ただいま人生絶好調』 海竜社 2003年  
著者（昭和8年1回本科理学科家政学部卒・日本女子大学名誉教授）は私にとって本学在学中だけでなく日本総合愛育研究所でもご親切なご指導を賜った大恩師である。先生は穏やかなお人柄でチャームングでお心の広い素晴らしい先生で、多くの教え子から尊敬されている。今年5月に江澤郁子先生（本学名誉教授）のご尽力により、本となって出版されたことはとても素晴らしいことで、是非一人でも多くの方に読んでいただきたい。江澤先生によるご紹介（桜楓新報613号）を引用させていただくと、『～仕事を離れた八十代からの愛と冒険、ユーモラスな逸話がぎっしり詰まった玉手箱とでもいうのか、“年をとるのも悪くないな” 思える強壯剤のような本です。～健康で、凛として老いるための知恵がつまったこの本は、われらが大先輩が後輩にプレゼントしてくれた宝物です。先生から元気と勇気をいただき、われらも後に続こうではありませんか。』。

### ■佐 野 綾 子（被服学科助手）

水村美苗著 『本格小説』 上、下 新潮社 2002年

ところは軽井沢と東京郊外の町、時は戦後間もなくから20世紀の末近くまで。軽井沢とその周辺の自然や、日本の戦後の社会構造と社会変化が巧みに描かれています。私小説的な導入ですが、物語は恋愛小説「嵐が丘」を換骨奪胎した見事な構成となっています。まさに和製の「嵐が丘」といえるでしょう。当時の時代背景が垣間見られるシーンがあり、たとえば古くなった着物をえり分けるシーン、派手なものを若い人に譲ったり、ほどいて寝具に縫い直したり。江戸時代には、衣類のリサイクルが当然のこととして行われてきました。それが現代では、物が豊かになりそういった観念が低下しているように感じます。現在の物の豊かさについて再考するきっかけにもなると思います。また文章は、現在の日本において失われつつある、日本語の繊細な表現の豊かさを存分に駆使した、流れるような文体でつづられていてとても読みやすく日本語が新鮮に映ります。加えて引き込まれるようなストーリー展開がなされており、気持ち良い余韻の残る作品です。

### ■八 木 京 子（日本文学科助手）

和田萃著 『飛鳥：歴史と風土を歩く』 岩波新書 2003年

いま、古京飛鳥には多くの資料館が相次いで建設され、それに伴う遺物の発見は、さまざまな知見をわれわれに与えてくれている。本書は、それら最新の発掘成果を写真や地図を補いながら、丁寧に解説する一冊である。著者によれば、飛鳥ブームはいったん陰りをみせ、観光客も減少の一途を辿っていたという。しかし、近年の酒船石遺跡（亀形石槽）の建造物や、飛鳥池遺跡からの富本銭の発掘は、歴史をくつがえす一大事として耳目に新しく、飛鳥がまた賑わいを見せ始めている。

飛鳥の観光には、自転車<sup>あきつ</sup>が最適である。とはいえ、道々には蛇のなまなましい抜け殻があったり、また八月ともなれば、蜻蛉の大群に、頭から突っ込んでしまったりもする。春三月、山ざくらを求めて吉野を行けば、すっかり日暮れて宮滝あたりで迷ってしまうこともある。本書が一冊、手元があれば、安心かつ知的な旅が楽しめるであろう。

### ■村 井 早 苗（史学科助教授）

石川英輔著 『大江戸えころじー事情』 講談社 2000年

ここ10年余りの間に情報社会は益々発展し、パソコン等電子機器が操れない人間は生きていくのが難しくなっている。一方、エネルギー問題、ゴミ問題等は深刻さを増している。学生の卒業論文でも、近年、江戸時代のゴミやリサイクルの問題が取り上げられることが多い。本書は化学燃料の大量使用が前提となっている現代社会に対し、太陽エネルギーだけで生きてきた江戸時代までの循環型の日本人の生活を綿密に描き、様々な問題提起をしている。例えば「未舗装の道路を空調機代わりにしていたり、着古したゆかたを、おむつまで使い尽くしたりと、身の回りのものを有効利用していた」というのである。しかし、決して“江戸時代バラ色論”ではなく、その不便さを充分に示しながら、江戸時代に戻るのではなく、江戸時代の生活に学びながら、高度に進んだ自然科学の知識を巧みに生かして、化学燃料に依存した生活から循環型の世の中への転換を示唆している。

■井出祥子(英文学科教授)

津曲敏郎編著 『北のことはフィールド・ノート：18の言語と文化』 北海道大学図書刊行会  
2003年

ことは、そのことを話す人々のアイデンティティを支えるものである。また、話者にとってかけがえのない文化そのものでもある。話者をとりまく環境は、その話者たちに適応しやすい形で分類されており、その共有認識というかたちの文化が、ことはの仕組みに映しだされているからである。本書は、環北太平洋の諸民族(日本列島・朝鮮半島から東北へ進み、ベーリング海峡を越え、カリフォルニアへと弧を描く北太平洋地域の少数民族)の失われつつある小さなことばたちを訪ねて、それぞれのことばと話者の生活と文化、話者の心の世界を窺う19人のフィールドワーカー達のエッセー集である。極北の厳しい環境へ身を挺して赴き、現地のインフォーマントと親しい人間関係を築き、彼らのことはの行く末についても共感をもって語っている。著者達の姿には、経済が牽引する世界の歪みに対して、地球のあるべき姿に地道に貢献するさまが読みとれる。

■森田伸子(教育学科教授)

齊藤道雄著 『もうひとつの手話：ろう者の豊かな世界』 晶文社 1999年

ろう者あるいは大文字のDで始まる Deaf という言葉は現在、単なる医学的な「聴覚障害者」ではなく、「手話という固有の言語と文化を持つ人々」を示す言葉として、広く用いられるようになった。しかし、講演会の手話通訳やテレビの手話ニュースなどで私たちがしばしば目にする「手話」は多くの場合、手指に置き換えられた「日本語」に過ぎず、ろう者の母語たる「自然手話＝日本手話」とは別のものである。純粹に視覚的な日本手話と音声言語である日本語との間の違いは深く大きい。「口話主義教育」はこの溝を、もっぱらろう者が聞こえない声を聞き、発声をするという一方的な努力によって越えられるべきものとしてきた。本書は、この裂け目を「聴者」の側から越えようとした冒険の書である。この冒険を追体験する時、私達は言語というものの複雑で多様な可能性、ひいては人間存在の不思議さに驚く。これは、聴者、ろう者双方にとって必読の言語入門書である。

■平木典子(心理学科教授)

作・梨木香歩 絵・出久根育 『ペンキや』 理論社 2002年

『西の魔女が死んだ』(小学館)で日本児童文学者協会新人賞など多くの賞を受賞している児童文学者梨木香歩さんが絵本に挑戦したシリーズの一冊目である。その帯には「喜びや悲しみ、浮き浮きした気持ちや寂しい気持ち、怒りやあきらめ、みんな入った「ユトリロの白」を塗りつづけたある職人の物語」とある。著者の決して生々しくも激しくもない、穏やかで入念な筆致は、しんやという主人公ペンキやの「はげ」とマッチして、ことはでは表現しきれない微妙でほほえましい、あるいは激しく重い人生の機微があることを伝えてくれる。そして、読後には、しばらくの間、どこか遠くから迫ってくる自分の人生と重なる思いにふけることになる。また、この物語は、しんやが体験し追求した色を髣髴とさせる出久根氏の絵によって、絵本ならではの醍醐味を放っている。優しい気持ちになりたいときに一読をすすめたい。

■永田三郎(物質生物科学科教授)

B. Edelman ed. 『Dear America : letters home from Vietnam』 Pocket Books, Simon & Schuster, Inc., New York, c1985.

ベトナム戦争、それはアメリカ側から見れば、のべ300万人の兵士と第二次大戦全体で使われた量の総計を上回る弾薬を投入しながら、みじめな敗北を喫した戦争だ。この本は、戦地のアメリカ軍兵士から家族、友人などに送られた手紙を中心に、208通を編集したもの。国家の誤った「大義」によって戦場に身を置くことになった、学生諸姉と同世代の青年たちのこころのありようをうかがい知ることが出来る。生還者の手紙も含む点で、戦死者の手紙をまとめた『スターリングラードよりの最後の手紙』(伊東泰治編、同学社)や、最近第二集も出た『きけわだつみのこえ』(岩波文庫)とは違うが、合わせて読んでいただきたい。近い将来、私たちがこのような手紙を戦地の日本の青年から受け取るようになるかもしれない、というリアリティーをもって。蔵書検索によると、訳本『ディアアメリカ：戦場からの手紙』(現代書館)が本学図書館にあり。

## 大学の図書館が象徴するもの

田中 珠理

図書館ほど学校を反映するものはない。そこで見られるものは全て現状であると同時に学校が将来目指す姿でもある。言い換えれば、図書館を見れば、その学校が今までどのように発展し、今後どのような目標を掲げているのかわかる。ここでは、昨年私が留学した米国のウェルズリー大学を図書館の視点から紹介したいと思う。

ウェルズリー大学は、大学の街ボストンの郊外に位置する伝統ある名門女子大学だ。学生数は少なく、図書館の蔵書量はハーバードやMITといったマンモス校と比較すればおそらく足元にも及ばない。ウェルズリーの学生は、文献を求めてこれらの大学へよく行く。驚いたことに、ハーバードやMITは複数の図書館を所有し、図書館によって蔵書の専門分野が異なる。一方、ウェルズリー大学の蔵書は多人種が共存する学校らしく、言語の種類が多い。雑誌や新聞などはアラビア語、ヘブライ語のものまで取り揃えてある。そして、学生のレベルの高さが落ち着いた雰囲気を作っている。図書館に荷物を置いてその場を離れても元の場所にあるのはこの大学くらいだと言われたことがある。また、館内にはそのまま眠りに落ちてしまいそうな程座り心地のよい一人用のソファがいくつもある。ソファの向こうは一面ガラス張り、噴水とボートが漕げる程広い校内にある湖がよく見える。私は友達と勉強道具を山程抱えて、よくこのソファに座りに行った。そして、閉館の午前0時まで各々の作業に没頭した。これは決して珍しい風景ではない。勉強の意欲に溢れる学生と、それを支える学校の体制が非常に整っていることの象徴ではないだろうか。ウェルズリー大学の学生は愛校心を共有するため、団結力が強い。その心が更にこの大学を盛り上げているということは間違いがないだろう。私は日本女子大学の一学生として、今後本校の図書館にもこのような活気が満ち溢れることを期待したいと思う。

(英文学科4年次学生)

## 背表紙からの読書

長谷川 郁子

私は2年生から、学内図書館でアルバイトをさせてもらっています。返却本を書棚に戻したり、一冊ずつ請求記号をチェックしながら、書棚の整理をしています。図書館中の背表紙と睨めっこするのが、私の日課です。すると、自動的にあらゆる本と接することになり、日本文学の私にも全く専門外の分野の本に、運命的な出会いをすることがあります。

ある日、社会科学分野の書架整備をしていて、一冊の本に出会いました。『甲南大学の阪神大震災』。それは、あの日の甲南大学、どんな復興活動を続けているのか、そして、亡くなった学生さんのことが書かれた本でした。どんな勉強をし、どんなサークルに入っていたのか、どんな夢を持っていたのか。ご家族、お友達によって、克明に書きつづられていました。とてもショックな一冊でした。学内図書館で、「阪神大震災」というキーワードで検索してみると、八十件にもなります。その中の一冊、『阪神大震災の被災者にラジオ放送は何かできたか―「被災していない人への情報はいらぬ!」と言い続けた報道者たち』。色んな文献に当たるうちに、情報の大切さを知り、「かけがえのない情報って何だろう」、「人に伝えるとはどういうことなんだろう」と、考えるきっかけになりました。

1年生の頃、大学の図書館は、何となく敷居の高い場所でした。学術研究を目的としていて、娯楽性を追及した資料は殆ど無いからです。でも、レポートや発表のためだけの利用や専門分野に偏らず、様々な分野の本を読んでみるべきです。図書館だよりの『今、学生にすすめる本』というコーナーを利用するのもお勧めです。大学図書館の本が語りかけてくれるものは、何かを考えるキッカケを与えてくれます。まずは、背表紙たちの声に耳を傾けてみるとよいと思います。

(日本文学科3年次学生)

## 洋書の棚にも行ってみた

田中 麻衣子

図書館の洋書係で、ラベル作りのアルバイトをしていて、いくつか気付いた事があります。

一つ目は、資料が保存されることの凄さです。自分が貼ったラベルは、何十年、何百年とずっと保存されるのです。そう考えると、資料を大切に扱おうという気持ちになります。またアルバイトに関しては、現在本を探す人が目印にするものですから、見やすいものを丁寧に作りたいと思います。しかし、いつかは貼りかえなければならなくなるでしょう。その時に、張り替え作業をする人に、いいラベルだと納得してもらえるように腕を磨いていきたいと思います。

二つ目は、当然のことながら、図書館には膨大な資料があるということです。私は英語が苦手なために、ほとんど洋書には手を触れた事はありませんでした。しかし、アルバイトを通じて、様々な洋書を見てきました。写真や表紙を見ることで、どのような内容かを推し量る事もできます。写真集などでは、字が読めなくても楽しめるものが数多くあると感じました。そして、時々洋書の棚に足を運ぶようにしています。そして、自分の学んでいる学科以外の資料に目を通す事も面白いと感じるようになりました。他分野に渡る資料が揃っているのですから、活用しない手はないのではないのでしょうか。今までに、調理、歴史、洋書の児童書、絵画、経済、薬などの本を気の向いた時に読んでみました。専門的なものになると追いつけません、教養として楽しむ事はできると思います。また、私は鳥類と魚類が好きなので、図鑑や生態の本には目を通すようにしています。

このように、卒業するまでに読める本は蔵書のほんの一部でしかありません。それなら、少しでも多くの本に触れておいたほうが、記念になると思います。その際、普段遠ざかっているような分野の本にこそ、あえて手を出してみるのもまた面白いのではないのでしょうか。

(日本文学科3年次学生)

## 韓国と日本の図書館

盧 回男 (ノ フェナン)

日本に来て以来、気がついたら母国である韓国と日本をあれこれ見比べていました。図書館もその一つでした。日本で始めて図書館を利用したのは、受験勉強のために、近所の中央図書館でした。初めの日、韓国とはあまりにも違う光景に驚きました。そして、ビクビクして、落ち着かない気持ちになってしまいました。

まず、私を驚かせたのは子供からお年寄りまで真剣に本を手にしていました。

韓国は秋になると「読書の季節」というタイトルをつけた広告で、国民に読書を呼びかけています。日本人の愛読心についても、韓国の人々に読書を勧めるにあたり、テレビで放送されたことがあります。日本では電車に乗っていても本を読んでいる人が少なくないのに、一方、韓国では地下鉄の駅に誰でも本が読めるようにいろんな本が用意されているにも関わらず、それを利用する人は少ないのが現状でした。

日本の図書館へ行った時、私が座った席の前に「読書する方のため、長い受験勉強は遠慮してください」と書かれていました。韓国では、図書館は、読書のために利用する人より勉強部屋として利用する人が多く、私は、その時もただ受験勉強のために利用しに行ったので、追い出されるのではないかと心配でした。そして、学校でも初めのころは、勉強は遠慮しなければならないと思っていました。

このような図書館に、普通の学生と違う経験や印象を持っている私ですが、今、学校の図書館でアルバイトをしています。そして、以前は珍しかった光景がごく普通に見え、近所の図書館ではビクビクしながらしていた勉強も、大学という場で今は堂々としています。アルバイトをすることによって、司書の方々の大変さも知ることができたし、また、色々な勉強にもなり、大変有り難く思っています。

(心理学科1年次学生)

## 展示「日本女子大学目白地区建物ウォッチング」

鈴木賢次

図書館玄関ホールで2003年11月11日より行っている展示は、学内の建物を対象にしたウォッチングの手引きです。明治・大正・昭和戦前期の建物6棟をパネルにして解説しました。ほかに、戦後に建てられた建物の竣工時の小冊子類、また、かつてのキャンパスの情景を掲載している学園史などを展示しています。解説や写真、図面をもとに、建物の前で時代の息吹を発見してください。

ここでは、展示を見ていただいた方が、実際に建物を前にしたときの見所について述べます。とくに、見落としがちな、建物の変化と細部の意匠、隠れてしまった魅力に注目することにします。(展示パネル作成は住居学専攻の片桐あずささんです。)



### <成瀬記念館分館（旧成瀬仁蔵住宅）>

5階建ての八十年館B棟の陰に隠れるようにして、竹垣に囲まれた木立の中に建ち、昔ながらの木戸から入ります。本学創立時（1901年）の建物としては唯一現存するものであり、創立者・成瀬仁蔵が住んでいました。和風の木造建築であり、規模的には中流住宅と呼ばれるものに属します。東京は、震災や戦災、急激な都市化のため、明治期に一般的であったこのような住宅が希少になってしまいました。

1階はほぼ建築当初の状態ですが、2階は今よりも半分以下の大きさでした。大正期に東・西・北の3方向に増築しています。北側の増築部は、窓にベネチアン・ブラインドを設け、室内も洋風の意匠です。もとの2階居室には机、椅子、ベッドなどで成瀬仁蔵生前の様子が再現され、明治から大正の和洋折衷の住様式が身近に見学できます。

□掲示参考資料□

- ・「日本女子大学紀要 家政学部」(P590.5-N-1) 第42号 1995年3月 p33~39  
成瀬記念館分館（旧成瀬先生住宅）の調査 鈴木賢次



現状南側立面図



復元南側立面図



成瀬記念館分館・外観



成瀬記念館分館・2階書斎

### <成瀬記念講堂>

創立5年後の1906(明治39)年、本学にレンガ壁の本格的な洋風建築が建ち上がりました。成瀬記念講堂の前身で、豊明図書館兼講堂と称し、1階は講堂、2階は今のよう階段状の客席ではなく、平らな床で書棚が置かれていました。このレンガ壁が関東大震災で崩れてしまい、残った木造の軸部、架構を生かし、外壁を木の下見板張りに変え、講堂専用として再建されました。

基礎部分にレンガ壁の名残が見られますので、これをもとにレンガ壁の姿をCGで再現しました。内部は見所が随所にあります。身廊・側廊と左右に突き出した翼廊による十字形の平面、柱上部で横に飛び出したハンマービーム、アーチをかたどった合掌の屋根架構、翼廊部の大きなステンドグラス、これらは西洋のゴシック教会堂を範としたものです。

□揭示参考資料□

- ・「日本女子大学総合研究所紀要」(P051-N-57) 第2号 1999年11月 p125~187  
日本女子大学成瀬記念講堂に関する研究 後藤 久(研究代表者) 鈴木賢次 渡辺保弘  
秋山俱子 小橋安紀子 坂本千珠



成瀬記念講堂・復元外観



成瀬記念講堂・復元内部

### <茶室>

豊明小学校側、桜楓会館の南側にひっそりと建っています。独立した建物で、規模も小さく、外観からはこの建物の真のよさが見えません。しかし、この茶室は本学の伝統を示す貴重な遺産の一つなのです。

創立当初、茶道を教えたのは松浦詮氏でした。同氏は、旧平戸藩主であり、伯爵でもあり、鎮信流の宗匠でもありました。当時、本学に茶室がなかったことから、同氏が寄贈したものです。現在の80年館のあたりに建てられましたが、戦後に移築されました。

見所は内部です。小間の茶室と座敷が配され、襖で仕切られています。低い開口(にじりぐち)、角に丸みのある面皮柱、素朴な土壁など、素材や意匠は草庵風です。大切に保守されてきたので、本格的な数奇屋建築であることはもっと広まってもいいですね。

□揭示参考資料□

- ・「日本女子大学紀要 家政学部」(P590.5-N-1) 第44号 1997年3月 p73~78  
日本女子大学・茶室の調査 鈴木賢次



茶室・外観



茶室・内部

### <樟溪館>



樟溪館・古写真



樟溪館・外観

関東大震災後の応急的な木造校舎による復旧工事を経て、1926（大正15）年には鉄筋コンクリート造による3階建ての校舎が建てられました。震災後の本格的な建築で、本学の新たな意気込みを示した建物です。戦後、樟溪館と呼ばれ、改修工事がたびたび行われて今日に至っています。設計は早稲田大学建築学科の教授であった佐藤功一氏で、本学でも住居学関係の科目の指導に当たっていました。代表作には早稲田大学大隈講堂があります。

2箇所の玄関に設けられた大きなアーチ、3階窓の小さなアーチの連続、さらに、窓枠や角部といった壁面端部でのレンガタイルによる縁飾りは洒落ていて、その姿は大正モダンの魅力を放っています。近年の改修工事では、外壁の一部が白い鉄製の折板に変えられています。無機的な外壁で、大正モダンの外観にはそぐわないでしょう。



樟溪館・エントランス



樟溪館・3階のアーチ窓

### <明桂寮>

寮地区には、使われなくなった寮の建物がいくつか残存しています。明桂寮もそのような建物で、地下1階、地上3階建て、鉄筋コンクリート造です。

設計は樟溪館と同じで佐藤功一です。1926（大正15）年に設計され、翌年、工事が行われています。当時としては、装備も整い、居住水準の高い、近代的な寮であったはずですが。しかし、戦後、生活様式の変化、住環境、とくに設備・機器類が向上し、さらに、新しい寮が建ちました。現代生活に対応するような改善が難しくなり、1993年に閉寮しました。

見所としては、1階の食堂で、南側に飛び出した部分に大きなアーチ窓が設けられ、南面はそれが四つ連続し、明るい室内をつくりだしています。樹木に恵まれた寮地区ですので、散歩がてら探訪してみてください。





明桂寮・古写真



明桂寮・食堂のアーチ窓

### <六号館>

児童研究所として、1928（昭和3）年に建てられ、現在は六号館と呼ばれています。目白通り南側、早稲田に向かう坂の途中で、門の奥の白い建物がこの建物です。

鉄筋コンクリート造で、建築当初は2階建てでしたが、現在は3階建てです。一見どこにでもありそうな箱型ビルです。しかし、細部に見所があります。玄関前に突き出た車寄せの壁面で、その入口部分の縁飾りは、段々状のモウディングが施され、タイルが張られています。かつては四角の窓の周囲にもタイルの縁飾りが付き、窓の下端・上端に水平の目地線が引かれ、軒にはコーニスが回り、水平性を強調した斬新な建物でした。

設計は樟溪館、明桂寮と同じく佐藤功一です。先の2棟で、アーチが用いられていましたが、六号館では見られなくなります。近代デザインの新しい動向として興味深いです。



六号館・古写真



六号館・玄関車寄せ

### その他の展示

#### ■日本女子大学校 敷地建物平面図

- ・創立の頃
- ・創立十周年の頃

#### ■日本女子大学建物竣工記念 小冊子（○印は成瀬記念館所蔵）

- 学園建設のために 1950年8月 15p \* 大学本館（泉山館）建設計画
- ・日本女子大学図書館 創立60周年記念 1964年6月 24p
- 日本女子大学附属豊明幼稚園・さくらナースリー園舎平面図 [1971年] 4p
- 日本女子大学七十年館 創立70周年記念事業校舎新築竣工報告書 1974年5月 14p
- 日本女子大学八十年館 創立80周年記念事業 1982年10月 6p
- 日本女子大学成瀬記念館 創立80周年記念事業 1984年10月 14p
- 日本女子大学附属豊明小学校新校舎落成記念 1998年5月 32p
- ・日本女子大学百年館新校舎落成記念 [2003年10月] 22p

#### ■図 書

- ・日本女子大学学園史関係 9冊

（住居学科教授）

## 「まずは」「もっと」日本女子大学図書館を知ろう！！

いよいよ新年度が始まります。新入生だけでなく、上級生も教職員も、学習・研究に臨む決意を新たにされていることと思います。大学で学習・研究するために大学図書館は欠かせない存在です。「まずは、」あるいは「もっと、」日本女子大学図書館を知るためのエッセンスをこの2ページに凝縮しました。

### 0. 「まずは、」図書館利用カード、持ってますか？

これがないと図書館に入れません。貸出にも必要です。カウンターで発行しますので、学生証をお持ちください。忘れた場合には当日限りのカードで入館出来ますので、声をかけてください。

### 1. 日本女子大学図書館は2館あります。

目白キャンパスと西生田キャンパスそれぞれに1館ずつあり、どちらの図書館も使えます。利用カードは共通です。開館日程や開館時間が異なる場合がありますので、ホームページや図書館入口にある日程表で確認してください。入口は2館とも2階になります。目白の図書館では鞆はロッカーにしまって、文房具などは備え付けのビニール袋に入れて持ち込んでください。西生田図書館では荷物は自由に持ち込めます。図書館内では貴重品やロッカーの鍵は絶対に放置しないように！

### 2. 図書を探すには。。

読みたい図書の書名や著者名がわかっている場合は、ホームページの蔵書検索（OPAC=Online Public Access Catalog）を使ってみましょう。ヒットしたら所蔵情報をメモし、そのメモをたよりに図書館内を歩いてみましょう。

蔵書はテーマごとに数字で分類されています。図書館にどんな図書があるのか大まかに知りたい場合は、分類の数字をたよりに歩いてみましょう。目白の図書館5階には上代タノ平和文庫があります。「平和」について探している方は、こちらにもお立ち寄りください。（OPACの所蔵情報では<上代平和文庫>と表示されます。西生田図書館に取り寄せることも出来ます。）

蔵書検索が上手くいかない、どこにあるのかわからない、自分のテーマが図書館の分類ではどこになるのかわからない、他キャンパス図書館の資料を取り寄せたい、図書館に無い資料を入手したい、などなどお困りごとはカウンターあるいは参考係までどうぞ。

### 3. 席はご自由に。コピー（複写）機は1階、2階（および目白は5階）にあります。

席（閲覧席と言います）の予約や手続きは不要です。空いていればご自由にどうぞ。図書館内は公共の場であり、知の累積を保存し提供している場です。おしゃべりや携帯電話は周囲に大迷惑です。飲食は周囲に迷惑であるとともに、その資料を直接傷めるだけでなく、虫類を図書館内に呼び、多くの資料に損害を与える環境の原因となります。

コピー機は1階雑誌、2階参考図書（辞書事典類）、（および目白の図書館は5階洋雑誌）のフロアにあります。（カラーコピー機は目白の図書館5階、西生田図書館2階にあります。）これらの資料は図書館の外に持ち出せない禁帯出資料です。コピーの際は著作権を意識しましょう。

「図書館資料は、調査研究のために、一部分であれば、コピーできます。」

そのほか、図書館内にはグループで学習する部屋やビデオデッキといった施設設備があります。これらはカウンターで手続きをしてください。

### 4. 貸出は5冊1ヶ月間。

外に持ち出す際には貸出手続きをお忘れなく。そして、図書館の資料は後輩に通じる皆さんのものです。汚さないように細心の注意を払ってください。紙は少しでも水を含むと膨らんでしまって

もとに戻りません。雨には特に注意！書き込みや（他の人が大変読みにくくなります。また、書き込みを消すときに強く消しゴムを使うと、本が壊れる原因になります）、折り目をつけること（そこから紙が切れてしまいます）は厳禁。付せん類は字が取れてしまうので、字にはかからないように。また長く貼っておくと糊の部分が資料を傷めます。返却の際は、忘れずに全部取り去ってください。

返却期限に1冊でも1日でも遅れると次の貸出ができません。予約者がいなければ何度でも継続して借りることが出来ます。返却期限内に図書と利用カードをカウンターまでお持ちください。（大学院生，教職員の方の貸出冊数は図書館の掲示などでご確認ください。）

## 5. ホームページを使いこなそう！（<http://www.lib.jwu.ac.jp>）



全てのアイコンをクリックしてみましょう。お役立ち情報満載，です。

蔵書検索のための講習会も開催しています（例年5～6月に図書館内で予定しています）。奮ってご参加ください。Online Journal や学外サーバの選び方，使い方は参考係までお尋ねください。

## 6. 参考係とは？

貸出をするカウンターの近くに，参考係というデスクがもう一つあるのを見つけた方もいらっしゃるのではないのでしょうか。ここでは，情報を求める皆さんに対して情報源を提供するサービスを行っています。つまり，図書館資料の案内だけでなく，図書館にない資料を入手するための相談，購入希望図書の受付，Online Journal や学外サーバの選び方・使い方，研究テーマに沿った資料・データベース類の案内，などで皆さんのニーズをサポートしています。また，ゼミや同じ研究テーマを持ったグループの方たちを対象に具体的なガイダンスを開催いたします。ご相談ください。

## 7. 「もっと，」詳しく知るために，パンフレット類を用意しています。

図書館のしおり（目白）	図書館のしおり（西生田）
日本女子大学図書館利用案内－目白－ 貸出と西生田相互利用	日本女子大学西生田図書館利用案内 1 貸出，施設，目白の図書館の利用
〃 図書の探し方	〃 2 図書の探し方 〃 2－2 図書のさがし方
〃 逐次刊行物と館内各施設	〃 3 逐次刊行物と AV コーナー
〃 レファレンス・サービス（参考係）	〃 4 参考係（レファレンス・サービス）

最後に。。

**図書館は皆さんのご来館を心よりお待ちしております。図書館でお会いしましょう！**

（館員・洋書係 吉原三紀子）

## 卒業生の図書館利用について

卒業予定の学生の皆さん、卒業後も図書館を利用できることをご存知でしょうか。平成16年4月以降に図書館のカウンターで、卒業生としての登録をすれば、新たな図書館利用カードを発行します。

圖書の貸出もできますので、どうぞご利用ください。

## 旧教職員の図書館利用について

専任の教職員の方は、退職された後も図書館を利用することができます。その際は図書館のカウンターで、旧教職員としての登録をしてください。

非常勤の教職員の方は、在職中は図書館を利用できますが、退職後は利用できなくなります。利用をご希望の場合は、図書館友の会会員の登録をして利用されるようおすすめします。

## 図書館（目白）からのお知らせ

### ☆5階フロアの閲覧室をビデオコーナーに変更します

5階フロア南側の閲覧室（中央、1室）は、平成16年4月よりビデオコーナーに変更となります。ビデオの閲覧室は、今までは1階AVブースの狭い部屋でしたが、5階フロアの広い部屋に移動します。学部授業がある通常の利用時間は、次のとおりです。

月曜～金曜日 午前9時10分～午後6時45分

土曜日 午前9時10分～午後4時45分

利用の申し込みは、5階カウンターで受け付けます。

図書館所蔵のビデオ資料のほかに、ご自分のビデオテープを持ち込んで、ビデオコーナーで見られることもできます。授業の合間などにも、どうぞご利用ください。

### ☆共同研究室は4階フロアに移りました

共同研究室は平成15年10月より、1階から4階フロア南側に変更となりました。4部屋（A～D）とも黒板がついています。Dの部屋は、16名まで利用することができます。学部授業がある通常の利用時間は、次のとおりです。

月曜～金曜日 午前9時00分～午後6時45分

土曜日 午前9時00分～午後4時45分

利用の申し込みは、2階カウンターで受け付けています。

## 図書館（西生田）からのお知らせ

### ☆アフガニスタン関係資料の展示について

ブラウジングコーナーに展示中のアフガニスタン関係資料を追加しています。また、1月のアフガニスタン教育支援プロジェクトでアフガニスタンの教員が図書館に来館した際、現地の学生が作成している新聞を図書館に寄贈されました。〔誌名：Journalist-i-Balkh（アフガニスタン パウフ大学学生新聞）〕これも併せて展示してあります。どうぞご利用ください。

**編集後記** 図書館玄関ホールでは、住居学科鈴木賢次先生企画の展示「日本女子大学目白地区建物ウォッチング」を行っています。新生生の皆さんも、一度立ち寄ってみてくださいね。大学の建物には、それぞれの歴史があります。巻頭のカットは、西生田図書館で学生アルバイトをしている足立真冬佳さん（文化学科1年）が描いてくださいました。猫ちゃんも春の訪れ“March”を喜んでいるようです。（田口）